

# A c a n t h u s

(土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語)

第187号 2025(令和7)年3月12日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会  
HP <http://www.sin-syu.jp/>



進修同窓会 HP にアクセス



定時制演劇公演「ベニスの商人」(定1回野澤良佑提供)

## 演劇公演

土浦一高定時制 演劇部 事始め  
1948 [昭和23]年4月1日、新制土浦一高が誕生しました。全日制では旧制土浦中学校からの各部が活動を継続していましたが、定時制ではゼロからのスタートでした。今号では「定時制演劇部の事始め」を取り上げます。

1948 [昭和23]年5月10日、定時制入学式が挙行され、64名が入学しましたが、戦後の混乱が続く、授業さえも満足にできず、部活動どころではありませんでした。それでも、1950 [昭和25]年12月には定時制機関誌『星座第1号』が発刊されるなど、各部の活動も始まったようです。1952 [昭和27]年5月発行の『星座第2号』「クラブ活動だより」には、1951 [昭和26]年度の部として、華道部・文芸部・写真部・電気研究部・英語部・社会研究部・卓球部・箏球部の名が挙がっています。演劇部の名は見えませんが、「ただ第一回の卒業生を祝してつたないながら同好者一同が巣立ち行く先輩の方々に演劇をという事」になり、同年の文化祭で、次の3作が上演されました。

- 菊池寛原作「屋上の狂人」  
脚色…4年 塚本芳久  
演出…茨大 皆川 実
- 演出…1〜4年有志
- 三好十郎原作「おさの音」  
脚色…1A 山崎 孝  
演出…茨大 皆川 実
- 出演…1A有志
- 英語劇「ベニスの商人」法廷の場  
出演…2A有志

「ベニスの商人」で、ポーシヤ役を演じた定3回大木(山本)房子は、1997 [平成9]年9月刊行の『進修百年』「皆、美しく老いて」の中で、演劇の思い出について、次のように述懐しています。

「……。私達が定時制に入学した昭和二十五年は、いまだ戦後の物資の少ない時で、経済的にも世の中全体がまだ豊かではない時代でした。また学制改革で六・三・三・四制になり、新制度と旧制度の挟間にあった時でした。定時制ができて3年目、従って新入生の入学前の経

歴も多様で、年齢的にも社会的にも幅がありました。

……。二年生のとき、文化祭で英語劇をクラスで上演しました。「ベニスの商人」を取り上げたのですが、レコードで韻を踏む発音を真似ながら時間に余裕のない中を、夜遅くそして日曜日登校して練習をしました。舞台装置や衣裳づくりに時間も時間を遣り繰りました。その結果は予想以上の出来栄でした。普段はとくに厳しかった数学の土井鱗助先生 [在職1943 [昭和18]年〜1970 [昭和45]年] からお褒めのことを頂いた時は皆感激しました。……。」

## 演劇部誕生

後年長く演劇部顧問を務められた稲吉一雄先生 [英語 在職1952 [昭和27]年〜1985 [昭和60]年] が、1952 [昭和27]年4月に赴任されると、演劇部創部に向けて尽力され翌年11月21日の文化祭では、秋月佳太作「山の湖」一幕が演劇部の公演として上演されました。以後、演劇部では文化祭での公演が恒例となり、時間を惜しんで稽古に励んでいました。その稽古の日々を、定6回川俣光は、『星座第7号』 [1957 [昭和32]年3月発行] に次のように記しています。

「夜間高校生と演劇 4A 川俣光  
私は演劇というのを見ること又自分で演ずることも非常に好きだ。演劇を見ることがはずっと以前からしていたが、しかし出演して実際自分で行ったのは去年の文化祭「昼も夜も」の体操の青山教師を演じたのだ。私は小学校の学芸会で劇をして以来舞台上に上がって劇をしたのはこの機会までずっとなかったのです。いささか不安ではあったが、先輩の指導の基にどうやら成すことが出来たのだ。しかし我々夜間高校生としての演劇に於いては、上手下手はともかくとして

私達の場合には演劇をすることによって上級生下級生とが共に演じながら和解し友人として話をし、交際して行くといった方面にも生かして行くことが又大切であると思うのである。実際問題として私達は下級生との交際は時間的にも又そういった機会が実に少ない。いやないと言った方が良くかもしれない。このようなことを言うのは真に演劇を愛していないことかもしれないが、しかし私達の場合後者の方が望まれるのが良いと私は思うのだ。と言って、演劇そのものは下手でもいいと言っているのではない。上手に出来ることにこしたことはないのだ。このような考えを思いついたのも実は今回の文化祭を終えてなのである。今回の演劇「檻の中の人類」発表月前、私達は授業が終わると、決められた教室に行き練習を始めるのだ。そして時間の過ぎ去るのも知らず一生懸命にやっている。外は暗夜であたりはしーんとして静まり返っているが、しかしこの一つの教室が明るい電燈を照らし明るい笑顔をした人達だけがいる。私はこうしている時だけは何もかも忘れてしまうことが出来る。一通り練習がやっと終わる頃にはもう時計は11時を少しまわっている。皆それぞれに別れて家へ帰って行く。私はまだ劇の事が頭に残っている。秋も深まったらしくうすら寒い風が私の頬を冷やしてくれる。実に良い気持ちだ。

私が家に着く頃は11時半頃だが、母は私が帰ってくるのを首を長くしていつも待っている。そしてとくに冷えてしまっているお湯をわかしてくる。御飯のしたくもちゃんと出来ているのである。私が帰って来たのに安心して母は休むのである。  
こうした日を1ヶ月間私達は続けていき、文化祭に於ける演劇発表をしたわけなのであるが、こうした練習をしてい

る間に下級生の考えている事、望んでいる事などが或る程度理解できたような感じだ。一方個人くの性格までも理解出来たような感じだ。性格を理解することによって自分に適した多くの友人を知るということではなからうか。夜間高校生の場合はこうした境遇をもっともつとふやして行き演劇ばかりでなく他の方面もそうあつて欲しいものだ。ここでもし私がこのような行事に参加していなかったらならどうであつたらう。きつとこのような雰囲気も知らずに4年間を終わってしまったことだろう。

私にとつては、あらゆる面に於いてプラスとなつた。いつかは去り行く学校での良き思い出として私にとつては一生を通じても忘れることが出来まい。」

### 稲吉先生と演劇

定13回貝塚勇も、稲吉先生の下で演劇に励んだ一人でした。貝塚は、「演劇部のおもいで」の中で、稲吉先生と演劇について次のように述べています。

【1960「昭和35」年4月に「土浦一高定時制」に入学して程なく、草苺宏明先輩(定10回)に誘われて、演劇部に入りました。顧問は稲吉一雄先生です。演劇に興味があつたのが第一ですが、人前で話すのが苦手でしたので、それを克服するためもありました。

演劇部では、秋の文化祭公演に向けて1年間、稽古が続きました。4年生の時には、木下順二作の『夕鶴』を上演しました。毎年違う演目を上演することにしていましたので、舞台装置などは、全てを作り直さなければなりません。脚本は、私が文化祭用に書き直しました。部員は、午後9時に授業が終わると、そのあと遅くまで、そして日曜日にも登校して、練習をし、舞台装置や衣装作りにも時間を遣り繰りしました。

舞台稽古の合間に稲吉先生が、「演劇

の魅力ってなんですか」と、尋ねられました。部員たちからは、「自分と違う人生を演じられる。」「仲間と協力して一つの作品を作り上げる一体感。」「生舞台ならではの迫力と臨場感」等々、様々な答えが上がりました。すると先生は、「どれも正解ですね。」「と言われ、「私は演劇の多様性と寛容こそが最大の魅力だと思ひます。」「と、答えられました。

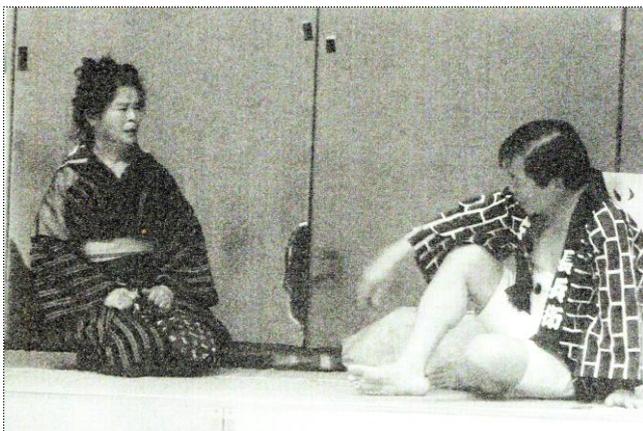
演劇では演者の多様な個性によって、多様な考え方を表現できます。また、同じ台本でも演じる学校によって全く別の作品になり得ます。さらに先生は、「正解は一つではありません。演劇はどこまでも自由です。」「と言われ、「皆さんは自分自身をさらけ出して舞台の上で立つて居ます。そして舞台上に立つている人々たちをスタッフが支えています。

これだけは忘れないで下さい。それさえわかまえておれば、演劇をやる資格は充分です。」「と、強調されました。公演当日、会場の旧講堂は観客で一杯でした。私は、「与ひょう」を演じました。「つう」は、3年生の緒方(大橋恵子)さん。その熱演に観客の殆どが涙を流していました。公演は大成。カーテンコールで貰った拍手は、今も耳に残っています。舞台を支えてくれた仲間の有り難さも忘れられません。」「

### はつらつ一座

「退職後、民生委員活動とともに、地域社会の活性化の手助けに」と思い、<sup>2006</sup>「平成18」年6月、「はつらつ一座」を立ち上げました。「はつらつ一座」は、高齢者の生きがいと健康づくりを目的とする高齢者福祉団体「県南地域高齢者はつらつ百人委員会」の有志により結成されたシニア劇団で、現在30名ほど居る座員の平均年齢は77歳余。各市町村の文化ホールで公演を続け、老人ホームなど高齢

者福祉施設利用者の方々をお招きして、お芝居を観ていただいています。毎月4〜5回、牛久市中央生涯学習センター2階で稽古を続け、公演に備えています。この劇団を支えてくれているのが、小島馬相談役と高尾ミト史一座代表です。小島先生は、長年新宿コマ劇場で橋幸夫さん、島倉千代子さんのビッグネームの公演を、脚本家として多数手がけてこられた演劇のプロです。百人委員会の「演劇をやってみよう」との声を聞き指導に乗り出してくれました。高尾先生は、元宝塚新芸座の女優で、かつて小島先生と同じ舞台を経験されたこともあります。結成直後の座員不足の折、座員急募の牛久市広報をご覧になり、馳せ参じて下さいました。



はつらつ一座公演「裏店ものがたり」  
(定13回貝塚勇提供)

小島先生書き下ろしの人情話と緻密な演出、高尾先生による演技指導、という大きな支援を得て、一座は公演を続けながら、芝居の質も高めてきました。現

在オ리지ナルの演目は6作を数え、19年間に57回の公演を重ねてきました。<sup>2007</sup>「平成19」年3月の旗揚げ公演では、三遊亭円朝が創作した落語の人情話「文七元結(ぶんしちもつと)」(歌舞伎では「人情話文七元結」として演じられる)を、小島先生が改題、脚色した「裏店ものがたり」全六場として上演し、私は主人公長兵衛役を務めさせていただきました。

自分の窮地をそつちのけにして、他人の難儀を救う長兵衛。江戸っ子の心意気と人情味あふれる登場人物のやりとりとが、笑いと涙を誘います。今の世に希薄となった義理人情や親子愛、夫婦愛、他人を思いやる心などが演じられます。長兵衛の惻隱の情と親子の情とを、どのように演じ分けるか、緊張に押しつぶされそうでした。

そんな時、女房お兼役を務めてくれた高尾先生が、「大丈夫よ、貝ちゃん。私の目だけ見てりゃいいんだから。」「と、助け船を出してくれました。それを聞いて、「そうだ、相手の目をしっかり見ればいいんだ。役者は目と目でものが言える、目と目で支え合える。」「のだと、肩の力が抜け、大役を演じることができました。

演劇は総合芸術です。役者の陰には大勢の人が働いています。照明さん、音響さん、衣装や舞台装置を作ってくれる美術スタッフの皆さん、スタッフ全員が力を合わせて、創り上げていく喜びがあります。

メイクと鬘の準備を終え、衣装を身に着けたら準備はバッチリです。観客席からは高揚感が入り交じったざわめきが聞こえてきます。高まつていく緊張感を味わいながら、私は舞台上立ちます。その度に「夕鶴」の感激が蘇ります。「(演劇部のおもいで)」